



布谷史人を聴きながら

松が取れ鏡開きも終わったタイミングであいさつの言葉に迷いますが、とにかく今年も大館市立図書館をよろしく願いいたします。

と言いながら今年最初の当コラムは、心苦しいお知らせから始まります。

❁ 中央図書館の駐車場が……

中央図書館の増設および松下村塾移転工事は、今のところ概ね順調に進んでいます。そしていよいよ2月からは、駐車場や庭園などの外構工事が始まります。工期に余裕があれば駐車場工事は分割して行いたいところですが、日程上そうもいかず一斉に行います。

という訳で、2月1日（水）から中央図書館の駐車場の一部が利用できなくなります。場所は南側の舗装されていない箇所ので、駐車はもとより通り抜けもできません。舗装が完成するのは3月に入ってからになります。

工事中は駐車台数も減り、皆様には大きな迷惑をお掛けすることになりますが、何とぞご理解の程お願いいたします。満車の際は文化会館など近隣公共施設の駐車場をご利用ください。また、大きな音が出る工事はなるべく月曜休館日に行う予定ですが、どうしても開館時に発生する場合も出てくるかと思えます。どうかその点もご了承くださいますように。

❁ 部活親の会小説とPTA小説

せっかくのまとまった休みなのに、あまり本を読めない年末年始でした。原因は孫。生後半年の女の子のなんと可愛いこと（個人の感想です）。目離しもならないし。

読んだ中で出版社で編集長を務めるバリバリのキャリアウーマン山田陽子を主人公に、一人息子の陽介が中学校で入った部活（吹奏楽部、略して吹部）の親の会に、嫌々ながら、しかしほとんど自業自得で巻き込まれていく3年間を描いた小説が、加納朋子著『我ら荒野の七重奏（セプテット）』（集英社、2016年、中央・比内図書館所蔵）。否応なく圧倒的な女性社会となる親の会に生じる嫌な面をこれでもかと描きながら、ドライな反面息子たちの演奏に滂沱の涙を流す主人公の感受性や献身的な仲間のエピソードに驚いたり感動したり笑ったりで、楽しい読書でした。

この本の前日譚というか、陽介の小学生時代を舞台としたPTA小説もあります。ドラマ化もされた『七人の敵がいる』（集英社、2010年、中央・比内・田代所蔵）。こちらもお勧めです。

なお本書のタイトルは、ご想像のとおり1960年のアメリカ映画「荒野の七人」のもじりです。「荒野の七人」が黒澤明監督の「七人の侍」（1954年）のリメイク版であることは有名ですね。ちなみに今月27日には半世紀以上の時を経ての再リメイク映画「マグニフィセント・セブン」が公開されます。邦題を日本語でなく原題のカタカナ読みにするのは昨今の傾向ですが、どうなんでしょうね。

❁ 布谷史人を聴く

三木露風作詞、山田耕筰作曲の「赤とんぼ」。歌っても聴いても日本人であることをしみじみ実感する童謡の名曲ですが、この曲の器楽演奏を聴くのが好きです。実演でのこれまでの個人的ベストは2つあって、ひとつは花巻市の文化会館で聴いた坂田明（アルトサクソ）のコンボ演奏、もうひとつが大館市民文化会館での布谷史人のマリンバ演奏です。いずれもCDやユーチューブでも聴けるけれど、生演奏ほどの感興は得られないのが不思議。

それはともかく、昨年同時リリースした布谷史人の2枚のアルバム、『クラシックス・オン・マリンバ』と『ピアソラ・オン・マリンバ』が揃ってレコード芸術誌の特選盤に選ばれたのは快挙でしたね。

マリンバが現在の形に発達したのは20世紀初頭のアメリカ合衆国とたいへん若い楽器なので、若い奏者が作曲や編曲、それに新たな奏法の開拓といった分野に取り組む余地がまだまだありそうで楽しみです。大館出身の布谷さんも各種コンクールで名を上げ、国内だけでなくドイツ、アメリカに活動の場を広げているホープのひとり。高校生の頃から彼を知る者として、折々に彼の努力と誠実で温かな人柄に接してきた者として、これからも応援していきたいし将来を見届けたいものです。というわけで、このところ布谷史人のCD三昧。聴く毎に滋味が増してくるようで、幸せな気分になります。まだの方、ぜひ布谷史人体験を。

1月18日（水）午後1時から、中央図書館で「図書館でホッとタイム（30）」を開催します。暁亭さんせきさんによる新春落語会です。入場無料。どなたでもお気軽にどうぞ。

図書館事業「手づくりトートバッグ製作」がスタートしました。一緒にトートバッグづくりをしてくれる仲間を随時募集しています。興味のある方は中央図書館（☎42-2525）までお尋ねください。（陽）